

工夫を促す対話を生かした製作活動

単元でねらうこと

本単元は、学習指導要領の内容(6)自然や物を使った遊び、(8)生活や出来事の伝え合い、(9)自分の成長に関わって構成した単元であり、第3学年理科「風やゴムで動かそう」につながるものである。

生活科では、「身近な生活に関わる見方・考え方を生かし」て学習していく。これは、児童自身が既に有している見方・考え方を発揮するということであるから、児童の生活経験すべてに起因する。その中から特に、本単元では、中学年の理科「量的・関係的な見方」「比較・関係付けの考え方」の基礎となるような見方・考え方に焦点を当て、

- (1) 素材の特徴に目を向ける。
- (2) 対話しながら気づきを広げ深める。

ことができる児童の姿を目指したいと考えた。

そこで、友だちとの対話を生かした試行錯誤を促すことにより、自分のおもちゃを工夫できる授業展開をめざした。これにより、単元を通して、対話が生まれやすい環境を設定し、友だちとの対話を生かして、教え合ったり、比べたり、試したり、見立てたりしながら学びを深めていくことができる児童を育てていきたい。



子どもが働かせるであろう見方・考え方

○量的・関係的な見方

- ・実際に動かす体験をもとに素材の特徴や働きを自分の言葉で表現する。

○比較・関係付けの考え方

- ・友だちのおもちゃとの動きが違うことに気づき、よりスムーズな動きやパワーアップの方法を考える。
- ・友だちとの対話から磁石や風のはたらきについて体験したり気づいたりする。

授業の実際

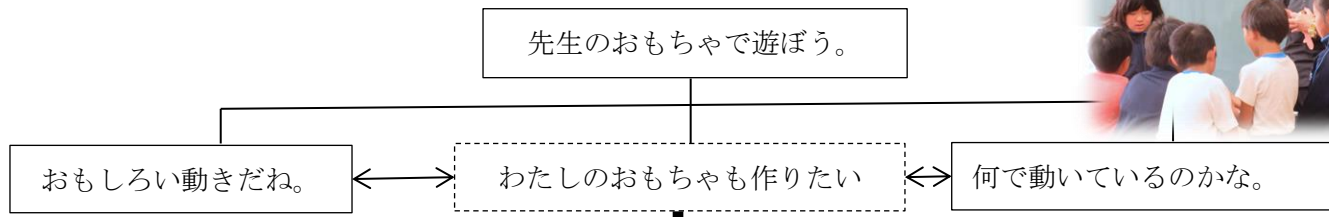
導入では、教科書に例示されているおもちゃを担当があらかじめ作製し、児童に提示する。おもちゃを動かしてみせることで関心が高まったところで、担任から「どうして動くと思うか」を問う。児童は「電池で動く!」「ゴムがついてる?」「空気だよ!」と、2年生なりの言葉で「転がるもの」「風」「空気」「輪ゴム」など、動力源や特徴に気づくであろう。

意欲を高めて、いよいよおもちゃつくりに入る。製作の相談はもちろん、近くの友だちに作っているおもちゃを動かして見せ合う姿が多く見られた。自分のおもちゃができあがり満足すると、友だちと一緒に遊ぶうちに、同じようなおもちゃでも動きが違うことに気づき始めた。おもちゃをパワーアップさせることができると確信した児童は、グループで相談を始める。

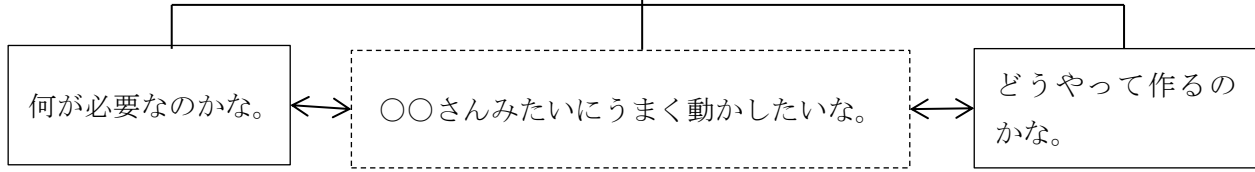
対話しながら、「どこがちがうの?」と、うまく動かない自分のおもちゃを考えたり、教師のおもちゃの仕組みと比較したりすることを繰り返して改良していった。おもちゃを作りながら遊び、遊んでは改良し続ける姿は、コースを作って競争するグループやとんだ距離を測ろうとするグループが出てきた。

自分がうまくできたことや出来なかったことを次の問い(課題)とするため、色分けした付箋紙に振り返った。友だちの活動にも目を向けることができるようにするために、「友だちに関係のあること」を視点としたことで、考えが認められたり、友だちを助けてあげられたことを自覚したりすることが実感できた。

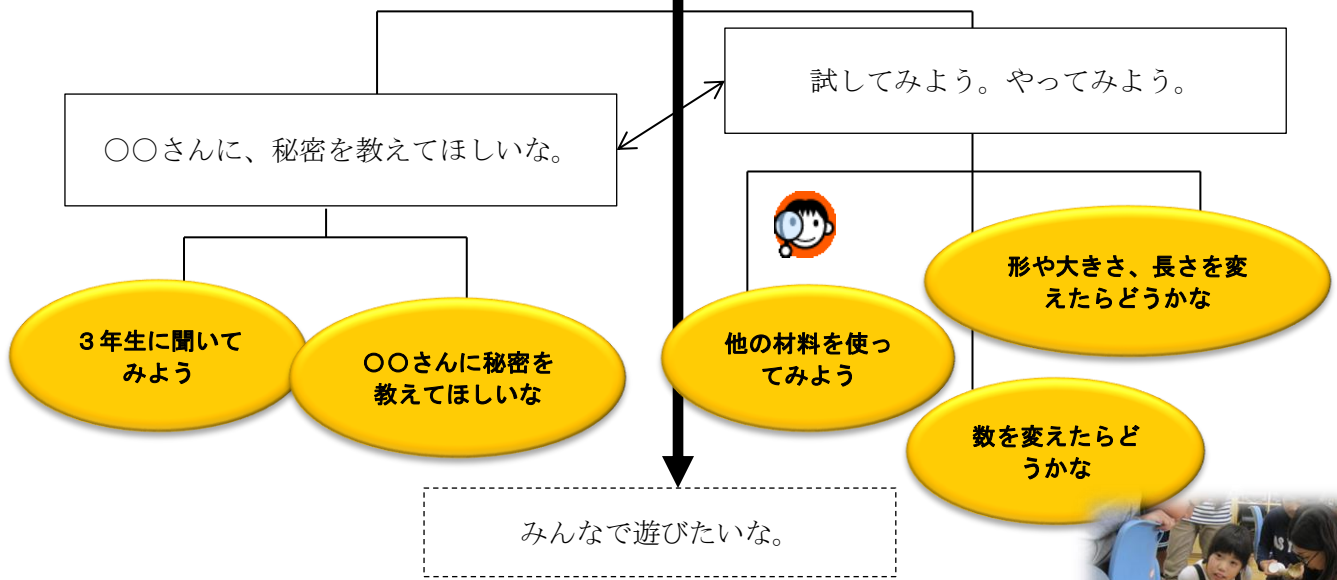
(H30 滝根小 鈴木)



うごく おもちゃを つくろう



もっと くふうしよう



あそび方をくふうしよう

